

平年より涼しかった8月も過ぎ、早くも秋がやってきます。7月の管内の気温は平年よりもかなり高めでしたが8月は平年並か低くなり、その影響もあってか沿岸の表面水温も7月前半は平年より高め、8月に入ってから低めに推移したようです。原因はオホーツク海高気圧によるものと思われる。中央水試海洋環境Gのオホーツク海宗谷暖流情報によりますと8月上旬以降、この高気圧の影響で宗谷暖流の勢力が次第に弱まっているようです。今後さらに勢力が弱まれば、宗谷暖流の外側に分布している麻痺性貝毒プランクトンが沿岸のホタテガイ漁場に流入して来る可能性も考えられます。今後の気象情報が気になるところです。

▼先日、ドローンを使ってマグロを釣る動画に驚かされました。オーストラリアで極太の釣り糸と餌を取り付けたドローンを海上に飛ばし、マグロの群れを見つけるとピンポイントで釣り糸と餌を落とし、食いついたマグロを岸からリールを巻いて釣り上げていました。ドローンは無人航空機(UAV)の通称で、最近では農業、測量、運送、防犯や災害対応など様々なところでの活用が始まっていますが、こんな使い方もあるのかと。

▼安倍首相の掲げる成長戦略の一項目として、地方創生特区に指定された地域において、ドローンを利用した産業発展などが検討されています。経済産業省は今年5月に「空の産業革命に向けたロードマップ」をとりまとめ、物流、災害対応、インフラ維持管理、測量、農林水産業などの幅広い用途に小型無人機を利用し、2020年代頃以降に有人地帯での目視外飛行による利活用を本格化させるとしています。将来的には多数の自律飛行する小型無人機が空を飛び交って、都市における物流などの様々なサービスを提供する社会が実現することも想定されるとしています。

▼現在、水産でのドローンの利用には、有明海においてノリ養殖の病害対策や品質および収量の向上、湖沼における赤潮や汚濁水などの水質の広域監視、全国でアユやウナギなど淡水魚を食い荒らす害鳥カワウ対策、カツオの群れを探索する研究などがあります。これらは漁場や養殖場の監視、害獣対策、魚群探索などを通じて生産量の増大や漁労作業の軽減に結びつく、あらたな技術分野と感じます。海上は有人地帯ではないので導入や普及が早いかもしれません。

▼北海道でもサケや浮魚群の探索、トドや密漁監視、定置網などの漁具の敷設確認などにすぐにでも利用できそうです。すでに水産研究本部では中央水試で沿岸の藻場調査、さけます内水試で内水面での資源調査などに導入も始まっています。また、水中ドローンというものもありますが、電波が水中を通りにくいため多くは海面に浮かべたブイなどと有線で繋がれ、ブイから陸上の携帯電話などにデータを送信することになり、空中よりは少し自由度が下がります。ただ、ドローンによるノリ養殖管理などが進んでいるのを見ると、自律で動く水中ドローンを利用できれば、現在網走水試で開発しているホタテガイ漁場の可視化技術開発などへの応用もそう遠いことではないように思います。

(網走水試 上田)